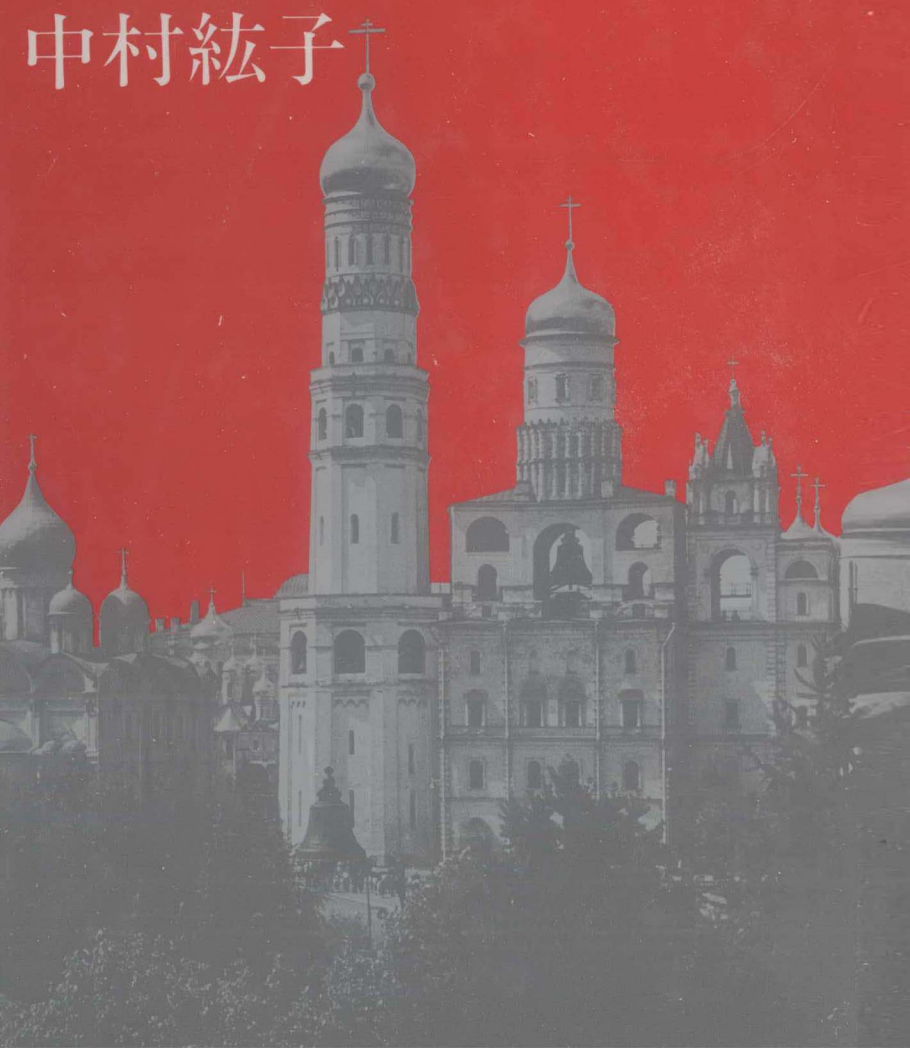


チャイコフスキー コンクール

ピアニストが聴く現代

中村絃子





チャイコフスキー コンクール

ピアニストが聴く現代

中村絃子

中央公論社

チャイコフスキー・コンクール

——ピアノリストが聴く現代——

一九八八年一月七日初版発行
一九九二年一月三〇日二版発行

著者 中村紘子

発行者 嶋中鵬二

印刷所 三晃印刷

製本所 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八―七

振替東京二―三四

©一九八八 換印廃止

ISBN4-12-001742-7

Printed in Japan

チャイコフスキー・コンクール 目次

はじめに

I スーパースターの誕生

9

II 神童からコンクールの時代へ

33

III コンクールが始まる

61

IV 採点メモから

81

V 長期戦における兵站の話

105

VI ランダルたちの運命

127

VII 女性ピアニストたち

147

VIII 「ハイ・フィンガー」と
日本のピアニズム

169

IX なぜバッハをショパンのように
弾いてはいけないのか

199

X コンクール優勝者が多すぎる

223

XI コンクールの時代のクラシック音楽

243

あとがき

263

チャイコフスキー・コンクール

——ピアニストが聴く現代——

福田章二さんに

はじめに

チャイコフスキー・コンクールは、正式名をチャイコフスキー記念国際コンクールといい、一九五八年の第一回以来四年ごとに、モスクワのコンセルヴァトリー（正式にはチャイコフスキー記念音楽院）大ホールを中心に、ピアノ、ヴァイオリン、チェロ、声楽の四部門にわたって催される音楽コンクールである。期間は六月から七月にかけて約一ヵ月、審査は第一次予選、第二次予選、本選の三段階があり、参加資格は十七歳から三十二歳まで（時々変更がある）という年齢制限があるのみ、今回一九八六年はピアノ部門において三十四ヵ国から百十一名のコンテストタントが参加した。

私は、一九八二年の第七回コンクールに引き続き、今回もこのコンクールのピアノ部門の審査員として、約一ヵ月間、ほぼ連日、一日平均十時間というもの、モスクワ音楽院大ホール一階の中央、前から五列目左寄りの席に座って、世界各国から集まったピアニストたちの演奏を聴き、そしてさまざまなことを考え感じて過した。

コンテストタントたちの演奏は、もちろん基本的に未完成で未熟だけれど、しかし、文化や伝統を異にする世界各国からの膨大な参加者の演奏に耳を傾け続けるうち、あるいはその未熟さ故な

のか、不思議に刺激的なものの想いに駆られるのは何故だろう？ と私は前回の審査のときから思ってきた。

今から十五年前、ニューヨーク・タイムズ紙上で四半世紀にわたって卓抜な音楽評論の筆を揮ってきたハロルド・ショーンバーグが初めて来日し、私を案内人にして、東京の演奏会のハシゴをしたことがあった。さまざまな演奏を聴きながら、彼は膝の上に拡げたプログラムに盛んにメモしていたが、時々ニヤツとして私にそのメモを示すことがあった。ミッキー・マウスがうまく描けたときであった。

コンクールの一ヵ月間、私も審査用紙によく愛猫タンクの絵を描いた。隣の審査員がのぞきこんで尻尾にリボンをつけ足し、うしろからのびた鉛筆が眼鏡を描き込んだりした。

しかし、審査用紙に書いたのはもちろん猫だけではなかった。以下、私が記すのは、いわばその審査用紙に書き込んだメモ、そしてそれに連なるものの想いである。

I スーパースターの誕生

1 ギレリス・フィーバー

モスクワの六月は、気まぐれである。

暑いとなると殊のほか暑く、寒いとなると殊のほか寒い。

前回の一九八二年のチャイコフスキー・コンクールのときは、六月十日にモスクワ・シエルメチエヴォ空港に降り立ったら、空は鉛色、東京の真冬という感じで小雪がちらついていた。それまで真夏の軽装で東独を演奏旅行中だった私は、あわててモスクワ在住の日本の知人からカシミアのスウェーターに毛のショール、裏に暖かい毛皮のついた分厚いブーツにいたるまでの一式を借りうけ、しばらくの間は着たがりスズメで震えていた。それでも風邪をひいてしまい、カラシの湿布などというクラシクな治療を受けながら、二日ばかり寝込んでしまった。

そこで、今回は十分の冬仕度を整えて、吹雪でも何でもやってこいという感じでモスクワに降り立ったところ、今年の六月十日のモスクワときたら、まるでタヒチにでも来たようだった。宵の口だというのに、白夜のモスクワの空は抜けるような青さで、肌を刺すように強い太陽が燃え、沿道の白樺の林も新緑が湧き立つようだ。

市内に入ると夏の光のせい、モスクワの銀座通りゴリキヤ大通りのショウ・ウインドウも

華やき、往来する人々の表情も浮き浮きとして見える。このゴリキー大通りの突き当りがあの「赤の広場」である。一九六九年の冬、初めてモスクワを訪れ、この「赤の広場」を見たとき、旅慣れたはずの私の心に珍しく、「ああ、旅に出たな」という感傷が湧き起ったものだった。チヨコレート菓子のような「歴史博物館」、赤い星のきらめくクレムリンの城壁、魔法の絨毯に乗って飛んできたかのような聖ワシリイ寺院の黄金色の屋根や極彩色の姿かたち……。何度見ても、私はエキゾチックな気分になせられて、軽い興奮を覚えるのである。

そしてこの「赤の広場」の手前を右折し、次の信号を曲ると、モスクワ音楽院のあるゲルツェン通りが始まる。

このゲルツェン通りに面した、コンクールの行われるモスクワ音楽院の正面には、チャイコフスキーの銅像をとり囲むようにして、コンクール参加国の国旗がはためいていた。その銅像の足元に、そしてそこかしこに、白い綿毛のようなものが吹き寄せられまっ白に積っている。ポプラ科かなにかの植物の種子なのだが、モスクワの人はこれを「春の雪」と呼ぶ。「春の雪」は、風にのって室内にまで入り込んでくる。しかし、コンクールの予選が進んで本選になる七月の初め頃には、もうどこかに姿を消してしまふ。

さてモスクワ音楽院は、このチャイコフスキーの銅像を中心に、コの字型を描くように建てられている。中央には一七〇〇人を収容する大ホールと六〇〇名ほどの小ホール、それをはさんで左右は教室、レッスン室、事務室や食堂その他さまざまな学校としての施設がある。

一八六六年に創立されて以来、このモスクワ音楽院は数えきれないほど多くの優れた音楽家た

ちを育み、世に送り出してきた。

大ホールのロビーの一角には、この音楽院を金メダルを手卒業した生徒たちの名前が、金文字で記念に刻み込まれている。私は、このホールにくるといつも、この名譽ある大理石の板の前に立ち、あるひとりの少女の名前を探す。ラフマニノフ、スクリャピン、マキシモフ、レヴィン、といった名前に続いて、私の探していた少女の名前が現れる。一八九八年、ロジーナ・ベッシー、のちのロジーナ・レヴィン、私のジュリアード音楽院での恩師の十八歳の栄光の記念である。

そもそも、少女時代の私の夢は、いつかモスクワ音楽院に留学してエミール・ギレリスに学ぶ、ということだった。

エミール・ギレリスは、一九一六年にウクライナ共和国のオデッサに生れたソヴィエトの大ピアニストである。この黒海に面したオデッサという町には、かなり大きなユダヤ人ゲットがあり、そこから多くの素晴らしい音楽家たちが生れた。ギレリスの妹と結婚し義理の兄弟となったヴァイオリンのレオニード・コーガンや、ダヴィッド・オイストラフもこの出身である（ギレリス、コーガンの義兄弟は、先年相ついでこの世を去ってしまった）。

ギレリスは一九五七年の秋に初めて来日し全国各地で演奏を行ったが、当時中学の二年生であった私は、東京で初めて彼のリサイタルを聴き、長い眠りから揺さぶり起されたような強い衝撃を受けた。「ピアノとはこういう音が出るものなのか。ピアノとはこう弾くものなのか」と、初めて教えられたような気持ちにさせられたのである。

その頃の我が国はまだ貧しく、文字通り発展途上国であったから、招聘される音楽家も今日のラッシュェぶりからは想像もつかないほど少なく、またそのほとんどが、戦前のSPレコード時代に全盛を極めた老大家たちばかりであった。それこそ、初めて来日した時のホロウィッツではないけれど、「ひびの入った骨董」に近い人たちが多かったのだ。当時の日本の一般レベルでは、功なり名とげた有名な大家でなければ、なかなか切符を売りさばくことができなかったであろう。

幼い私も、そんな老大家たちのリサイタルに何度か連れて行って貰った記憶がある。しかし、枯れた演奏とでもいうべきなのだろうか、彼らの過去の栄光をかみしめて初めて味わい深くなる種類の演奏に共鳴し感動を得るには、私はあまりにも子供だった、というよりも率直なところ、退屈であったという印象しか残っていないのである。

それが、何故か中学一年生のとき、レフ・オボーリンの独奏会に行って、本当に心の底から感嘆することになってしまった。ピアノ独奏会の最初から最後まで、身じろぎひとつせず聴き入るなどということは、私にとって初めての出来事であった。

オボーリンはモスクワ生れで、当時すでに五十歳。一九二七年の第一回ショパン国際コンクールの優勝者であり、ロシアがソヴィエト体制になってから登場した最初の大ピアニストであり、そして、戦後の日本が初めて迎えるソヴィエトからのピアニストでもあった。

その強烈な印象で、私の内におけるピアノというもののイメージが変わりつつあるとき、こんどは四十一歳の男盛り、演奏家として脂ののり切ったバリバリのギリリスがやってきて、その最初